

地域力で災害に備える

朝日町連合会



▲朝日町公園に集まり、それぞれ決められた班に分かれ、指示を受ける参加者たち

大 災害の教訓から、地域住民同士が協力して、防災活動などを行う「自主防災組織」の重要性が全国的に見直されるなか、朝日町連合会（古田秀夫会長）が主体となり、10月20日に震度6の地震発生を想定した防災訓練が行われました。この日は、関係機関が協力し、地域住民56人が参加し、避難訓練や救出搬送訓練などを実施しました。



◀スポーツセンターでは、消防署職員が消火器の取り扱いなどについて説明



▶訓練の最後はみんなで非常食用のパンを試食

連合会は、254世帯、530人（75歳以上96人）が居住する地域で、毎年老人クラブと合同で消火訓練を実施していますが、今回のような大きな訓練は初めて。昨年実施した麻町地域の防災訓練を参考に、1カ月前から準備を開始。各町内会長をはじめとするメンバーが数回にわたり会議をしながら、車椅子の住民や家の中でタンスが倒れて救助を待つ住民を想定し、役割分担などを決めていきました。

めて自主防災組織の必要性を感じていました。昭和29年から朝日町に住んでいる古田会長は、「自分も数回災害を経験していますが、水害が一番心配です。最近、他のまちで竜巻などの自然災害も多くなっているの、地域や個人で日ごろから備えることが必要」と訓練の重要性を話します。また、地域に住む子どもが少なくなる一方で、独居高齢者が増えていくなか、実際に災害が起こったときに要援護者を含め、避難所へ行くことができるのかといった課題も訓練を通じて見えてきたそうです。

連合会単位の大きな訓練ということもあり、普段あまり顔を合わすことのない他の町内会の人たちを知る機会にもなり、「訓練以外の面でも開催して良かった」と話す古田会長。「朝日町連合会では大きな行事をしていないので、防災訓練で人が集まりながら、ご近所同士顔の見える関係を築いていけたら良いです」と防災活動が、地域住民同士のコミュニケーション作りのきっかけになればと期待を寄せています。